

神と悪疫と人間

『疫病年日録』考

宮崎 孝一

ダニエル・デフォアの『疫病年日録』(A *Journal of the Plague Year*)は一七二二年に『モル・フランダーズ』(Moll Flanders)に次いで出版された。作者六十三歳のときの作である。一六六五年にロンドンで猛威を振ったペストに、市民が如何に反応し、対処したかの物語であり、実録ではないが、作者は当時の記録を広く参照し、大筋において誤りを犯さないよう留意したといふことである。⁽¹⁾

一 極限状況における人間

個人の生涯の有為転変を叙することから成り立っている

数編のデフォアの物語の中で、ペストの流行という社会事象を扱ったこの記録的読物は、一見、全く他と趣を異にした作品であるかの如き印象を与えるが、しかし、その実体においては、他の作品と共通する特性を備えている。それは、これもまた、極限状況における人間の営為を叙し、考察した作品であるといふことである。

『ロビンソン・クルーソー』は、無人島に漂着したクルーソーが、自分の生命を維持するために様々な工夫をこらし、独力で生活を打ち建てていく物語であるが、『疫病年日録』は、猖獗を極めた悪疫と対決するロンドン市民の苦悩と努力を叙したもので、主体が個人であるか、グループ

であるかの差はあるにしても、両者が極限状況に置かれた人間の営みを描いた物語である点においては変りはない（なお、敵対的環境に投げ込まれた個人の努力の物語として、『ロビンソン・クルーソー』は代表的であるが、他にも、『モル・フランダーズ』、『ロクサーナ』等々もやはり同様の基盤に立っている）。

ロンドンを襲ったペストは、一六六四年十二月に始まり、ロンドン西部から徐々に東部へと進み、一六六五年八月、九月が絶頂期で、九月末には死亡者数が減少し始め、翌年二月には完全に終熄したという。当時のロンドンの人口は約四十六万と推定され、ペストによる死亡者数は約七万五千であった。すなわち全人口の約六分の一である。

流行の最盛期におけるロンドンの様子は次のように述べられている。

ロンドンの風貌は今やまったく一変して、もはや昔日の面影はなかった。……どの人間の顔にも、悲しみと憂いが漂っていた。……近親の死をいたむために、黒いものを着たり、正式の喪服をつけたりする者も、もはや一人もいなかった。町々にはそれらしいお弔いの姿も見られなかった。しかし、死をいたむ悲しみの

声は町々にあふれていた。道を通りすがりながら、女子供たちが家の窓や戸口のところで声をあげて泣いているのが聞こえることも再三であった。それは、愛する者がまさに息を引き取ろうとしているのか、またはちょうど息を引き取ったばかりか、そのいずれかであるにちがいがなかった（一六頁）。

非常事態に置かれて、人々は死者をねんごろに弔う余裕など失ってしまったのである。しかも、流行が長引くにつれて、悲しみの声さえ聞かれなくなった。その理由は、

後になってからは、人々の心はすっかり麻痺してしまい、眼の前に漂う死の影に慣れてしまったからである。近親を喪うことなどそう大したこととも思わなくなったのだ。こんどはこっちの番だ、という意識がつけねにあったわけだ（一六頁）。

死体を手厚く葬っている暇などなかったから、毎日、死体運搬車が、死者の出た家を回り、死体を次々に積み込んで運んで来ては、各教区にいくつも掘られた大きな穴に投げ入れたのであった。この物語の語り手ということになっている馬具商H・Fは自分の教区に掘られた穴について次のように言っている。

この穴の中に平均五十ないし六十個の死骸を投げ込んだが、次にはもっと大きな穴をいくつか掘った。そしてこの中に、運搬車が運んでくる死骸を片っぱしから投げ込んでいった。運搬車が運んでくる死骸の数は八月の中旬から下旬にかけて毎週二百ないし四百であった。その穴をもっと大きく掘り広げようとしたが、死骸を地面から六フィート以上の深さに埋めよとの当局のきつい命令があるため、どうすることもできなかった。……かくして、ついに私が目撃した一大深淵を掘ることになったのである。それはあまりに大きく、とても穴などとはいえなかった(五九頁)。

ペストの蔓延を防ぐとして、市当局は様々な努力をする。その一つは感染家屋閉鎖(“shutting up houses”)である。一人でもペストによる死者の出た家は、扉を閉めて錠をかけられ、日夜監視人の見張りがついてその家の住人が戸外に出て病源を振りまくのを禁じようという方策である。これは、まことに思い切ったやり方であるが、H・Fによれば、所期の目的を十分に達し得たかどうかは、甚だ疑わしい。第一に、家には出入口がいくつもあって、その全部を見張っていることは不可能であったし、また、家の

者が監視人に買物その他の用事を頼み、監視人が家を離れているすきに、逃げ出してしまふこともあった。また、語り手は次のようなことも言っている。

……病人の家族の者を見張るために監視人を置くということは、効果が全然あがらなかった。……家人は暴力や術策を用いて平気でいつも家の出入りをしていたからである。第二に、こうやって飛び出した連中がたいていは病気を持った人間で、やけくそのあまり、方駆けずりまわって、他人に病気をうつして一向に平気であったということ、などである(七〇頁)。

また、健康人のように見えながら、実は病気にかかっている者も沢山にいたのであって、こういう者を隔離することとは不可能であった。

病気にかかった人間を全部有効適切に隔離してしまえば、健康な人間がそれらの病人から病気をうつされるということはいかにもありえなかった。第一、近寄ろうにも近寄ることができなかったからである。ところが、この真相は次のとおりであった。……つまり、感染は知らず知らずのあいだに、それも見たところ病気にかかっている気配もない人たちを通じて蔓延して

いったということである。しかも、その人たちは、自分がだから病気をうつされ、まただれにうつしたかもまったく知らないのであった(二五八頁)。

当時は、ペストの伝染がどのような経路によってなされるかは真実が分かっていたいなかった。病人の発する悪気(germ)と呼ばれる臭気や、病人の吐く息、腫瘍の悪臭などによって伝染するものとH・Fは考えているが(七四頁)、一般には次のような考えの者も多かった。すなわち、

……今次の悪疫があたかも神よりの直接のこらしめであり、その間何らの中間的媒介もなく、あの人間この人間といった具合に特定の人をたおす特別な使命を神から授かっていたかのように話す人がいるのを不思議に思わざるをえない。これはまさしく無知と狂信の然らしめるところで、当然輕蔑に値することであろう。これと同じようなことが、病気をただ空気によってのみ起こるとする人々についてもいえる。つまり彼らによれば、空気の中に無数の虫や眼に見えない微生物がいて、それらの生物が人間の呼吸といっしょに体内にはいるか、あるいは空気といっしょに毛穴から体内にはいる、いったん体内にはいると、その生物は猛毒も

しくは毒のある卵を生じ、これが血液と混じってついに全身をおかすにいたるとするのである(七五頁)。

一般人の考えを右のように批判するH・F、そして、たぶんデフォー自身も、現在の科学から見れば伝染経路について全く誤った推定をしていたことは皮肉と言わざるを得ない。むしろ、世俗の、虫とか微生物という考えの方が実態に迫っていたと言えよう。

結局、正体のつかめない疫病が相手なのであるから、庶民は薬にもすがる思いで、様々なものに頼ろうとした。魔法使いや魔女、詐欺師などの言うことを聞くために高い金を払い、また、いかさま医者や、怪しげな薬を売る者を追いかけてまわして何とかして有効な薬を手に入れようとした。思えば、現代社会においても、人間は日常性を離れた状況に置かれれば、平素は思いも及ばぬような突飛な考えに飛びつきもするし、奇態な振舞いにも及ぶのであって、この物語で述べられていることは決して誇張ではあるまい。

伝染経路が皆目分らないので、予防の方法も思い思いに、効果がありそうなものに頼らざるを得なかった。

人々がおよそ考えられるかぎりの予防手段を講じたことはいうまでもない。たとえば、市場で一切れの肉

を買うときでも、肉屋の手から受け取らないで、鉤かぎから受け取るというふうであった。肉屋のほうもその点ぬかりはなく、そのために特別に用意しておいた酔入りの壺に代金を入れてもらい、けっしてそれに手を触れるということはなかった。お客は釣銭をもらわないうでよいようにと、どんな端せがね金かねでも払える用意としていつも小銭を持って歩いてた（七八頁）。

また、駅舎の構内に落ちていた財布に対する一人の男の警戒ぶりにも、疫病に対する極度の恐れが見られる。その男は、

よし、おれが拾ってやる、持主がやって来たら、返してやらなくちゃ悪いからな、といった。そしてつかつかと家の中へはいって行って、水のいっぱいはいっている手桶を持ってきた。見てみると、水を財布のところにあけて、また家の中にはいってゆき、火薬を少しばかり持ち出してきた。火薬は財布の上にいっぱいまきちらされ、さらにそこから導火線がおよそ二ヤードも引かれた。ところで再びその男は家の中へはいってゆき、おそらくこのために用意していたらしく思われる真っ赤に焼けた火箸を一揃い持ってきた。導火線に

火がつけられると、やがて火薬は爆発し、財布は真っ黒焦げに焦げてしまい、一帯の空気も濛々たる煙でごろに消毒された。ところが、それでもその男は飽き足らないとみえ、焼けた火箸で財布が焼けただれまではさみあげていた。それが焼けてしまうのを待って初めて、手桶の中へお金をふるい落として、さっさと家の中へ持ってはいってしまった（二〇五頁）。

金銭の受け渡しや、ひとの落した財布を扱うのに示された、この極度の警戒心は、無人島において野蠻人や猛獣の襲来に備える際にクルーソーの發揮する神経質とも言える細心な気配りに通じるものがある。こういう場合、人間の想像力は際限なく活動して、無数の架空の場合を想定するのである。

しかし、いかに注意しても、ペストの猛威から逃れることは不可能に近いとすれば、市民はロンドンに留まることを諦めるのが最上の手段ということになる。宮廷は、いち早く六月にはロンドンを離れてオックスフォードに移った。このことについて、語り手は次のように言っている。

神の思召し召しによるとみえ、宮廷人たちは皆ここで無事に災禍を免れることができた。私の聞いたところで

は、病氣は彼らに一指もふれなかつたそうである。これに対して宮廷人たちが、大した感謝のしるしも、また、なんら改心の実もあげなかつたことは——少なくとも私自身それを目撃することができなかつたことは、残念なことだと思ふ。大変失礼な言い分かもしれないが、じつをいえば、宮廷人の非道な所業がこの恐るべき天罰を全国民の頭上に招くのに与つて大いに力があつたともいえるのだ。ただ、彼らは耳をおおつてこのことを聞こうとはしなかつたのである（一六六頁）。

この宮廷人に対するH・Fの言葉には、王政復古時代の、王を始めとする貴族たちの奢侈、淫靡、遊蕩の氣風に対するデフォーの批判が込められているものと考えられる（デフォーの王政復古期の宮廷批判は、後に『ロクサーナ』において、一層具体性を帯びてなされることになる）。

さて、宮廷に限らず、経済的に余裕のある者や、地方に身寄りのある者は、競つてロンドンを逃れて疫病感染の恐れのない土地に移つたのであつた。しかし、このような好条件に恵まれない者でも、何とかしてロンドンを逃れたいと願うのは当然であつたらう。

パン屋のジョンと帆作りのトマスという兄弟と、その友人の指物師のリチャードの三人は、頼つて行くあてもないまま、テントと馬一頭、それに鉄砲一挺を持ってエセックス州を目指して旅に出る。三人は、それぞれの特技を生かして野營の旅を続け、途中で更に十三人ほどの避難民と合流し、水や食糧の調達に苦心し、また、通り過ぎる町々の住民たちの嫌疑や妨害を排除したりするのにも種々の工夫をこらすが、このエピソードは『ロビンソン・クルーソー』のミニアチャー版の観があり、敵対的な環境の中で生き残ろうとする人間の行動がまざまざと描かれている。実際このグループに代表されるような避難民がたくさんいたのであつた。

野原や森の中に掘立小屋や避難小屋を作つて住んだり、穴や洞窟の中などで、仙人みたいな生活をした人も大勢いた。そういうところでの生活がどんなに苦しく困難なものであるかは、われわれにもたやすく想像できる。……不運な放浪者のなかには、孤立無援のままに、人に知られずに死んでいったものもあつた（一五〇頁）。

二 神意と疫病

ペストは人間への罰として神が下し給うたのだというのが、当時の一般の人々の通念であった。H・Fもそう信じていた一人である。しかし、それでは人間はこれに対してどう処すべきかの具体的問題になると、結論は簡単には出なかった。

疫病に襲われたとき、H・Fがまず直面した問題は、ロンドンに留るべきか、逃れるべきかということであった。

H・Fの兄は早々と疎開の決心をし、家族を先に送り出して自分も後に続くつもりになっていて、H・Fにも彼にならうように勧めた。しかし、H・Fは、「自分は生命を神におまかせするつもりだ」(九頁)と言ってロンドンに留まる決心であったが、一方、兄の勧めに従おうという気持も動き、その準備をしようとするが、馬が一頭も手に入らず、また、同行するはずだった従者が彼を置き去りにして逐電してしまった。このことに、H・Fは神の意志を見ようとする。

ある朝のことであった。私はこの疎開の問題につい

て考え込んでいたが、ふと次のような考えが湧き上がってきた。それは、神のお力の導きと許しがなければいかなることも人間には起こりえないとすれば、私の再三再四の蹉跌はけっしてただごとではない、ということだった。それは、私がロンドンから出てゆかないことが結局神の意志であるということ、明らかに示し、告げているのではないか。私はそこで、もし自分が残留することがほんとうに神の意志であるとすれば、必ずや神は、やがて襲い来たるべき死と危険の渦中においても、自分をしっかりとお守りくださるにちがいない、と考えざるをえなかった。そして、もしわが身の安全を計るあまり、自分の家を捨てて神の(私はそう信じていた)啓示にさからうようなことがあれば、それはまさしく神から逃げ出すことになるのではないか。たとえどこへ逃げようとも、神はその裁きのみ手をのびし給うて、随時随所において私を捉え給うのではあるまいか、と考えたのであった(一〇—一一頁)。

H・Fのこの気持を聞いた兄は、それを一笑に付し、回教徒の奉ずる予定説——あらゆる人間の死は前もって予定さ

れ、絶対に変更されえないものだという信念——などを引き合ひに出して、H・Fの考えの誤りを指摘した。ここにおいて彼はまた気が変わり、神が自分をどういふ場合にも守って下さるなどと考えるのは生意気で、ずうずうしいこと (presumption) であり、自己中心的な態度ではあるまいかと感じる。摂理に関するH・Fの想念は流動的なのである。そして、遂に彼は聖書古い (Bibionancy) を試みる気持ちになる。彼の開いた聖書のページは、詩篇第九十一篇を示していた。「……なんじ至上者いとがきものをその住居すまいとなしたれば、災害わざはひなんじにいたらず苦難なやみなんじの幕屋まぐらに近づかじ」(二三頁)。これを読んだH・Fは次のような反応を示す。

私がこの瞬間から、ロンドンに残留することを決意し、己が全心全霊をあげてことごとく全能の神の仁慈と加護に委ね、他のいかなる避難所をも求めないことを決意したことを、あえて読者諸君に告げる必要はないかろうと思う(二三頁)。

この詩篇の句に関するH・Fの解釈が正しいという確証はなく、読者を文句なしに納得させる力も乏しいと思われるが、ともかく彼はこのようにしてロンドンに留まることになる(小説作法の観点から見れば、デフォーは他の小説における

と同様、この作品も特定の語り手に一人称で語らせる方法を取った。語り手H・Fはロンドンに留まらない限り、疫病流行の様を身をもって観察することができないわけで、H・Fにロンドン残留の決心をさせたのは、デフォーの講じた「からくり」に過ぎないという観方もできよう)。

さて、H・Fは後々まで自分の決断が正しかったという確信を維持していたわけではない。それは次の言葉にも見られる。

……摂理の命ずるところによって私自身はそうはできなかったが、疫病に対する最良の対策はそれから逃げ出すことだというのが私の意見であり、また私の疫病に対する処方箋である。世間の人が、神は危険のさなかにおいても、われらを守りうるし、また危険から脱したと安心したときでもわれらを死に導きうる方である、などといいいながら、みずからを慰めていたのを私は知っている。そのために無数の人々がロンドンに残ったわけだが、その人々の死体が今や累々として一大墓穴の中に横たわっているのである。危険を感じていち早く逃げ出しておれば、災厄を免れていたろうにと、私は信じている(九七―八頁)。

このように、筆者のよしとする疫病対策、また、その根本をなす神意の解釈は不変ではなく、自分の思考や信仰の範囲を越えた状況に直面して激しく揺れ動いているさまが窺われる。

H・Fの精神の動搖に關し、ツィマーマン(Everett Zimmerman)は次のように言っている。

H・Fが、自然界を支配している一貫した精神的指標を見出そうとすると、物質的現実が非常に強力に眼前に迫り、そのため、彼は、それを自分の宗教的想定と十分に調和させることができない。疫病の、安定を亂す力が彼の心の中の緊張を露呈し、彼の感じている葛藤と高まる不安とを表面化させる。こうして、人物像の方が、教訓より強く印象づけられることになる。⁽²⁾

H・Fの神意に対する態度が明確でないことについて、ルイーズ・ランダ(Louis Landau)は次のような説明をしている。

H・Fによって表明される宗教的態度が曖昧な感じを与えるとすれば、デフォーが疫病に關して、伝統的な考え方と、新しい見方との両者を反映していることに理由がある。一方においては神の審判として、他方

においては自然の災害として考える態度であつて、ここに矛盾の生ずる源があるのである。⁽³⁾

ランダは更に言葉を續けて、「十八世紀の合理主義では、神の怒りの説は全面的には受け入れられず、疫病は自然現象として説明できるという考えが少なくとも知識階級の間には広まっていたのだ」と述べている。⁽⁴⁾

H・Fが強い信仰心を表明しているようでありながら、所々でそれに反するようなことを述べるのは、『ロビンソン・クルソー』においてしばしば見られる主人公の信仰の動搖にも通じるものがあり、時代思潮の反映と考えるべきなのであろう。ポーラ・バックシャイダー(Paula Backscheider)は、はっきり次のように言っている。

H・Fは、デフォーの時代における、人格神に対する信仰の崩壊と、確固たるものを求めての、人間のはかない探索とを體現しているのである。⁽⁵⁾

ペストの流行が治まった後におけるロンドン市民の生活状態に關する記述も、神の審判としての疫病の解釈を裏づけするものではない。

ロンドンが新しい相貌を呈するようになったのだから、市民の態度も一変した、と本来ならばいいたいと

ころである。自分が難を免れたという深い感慨をその表情に歴然と示している多くの人々がいたことは、疑うことのできない事実であった。その顔には、最悪ともいふべき時期に自分を守りつづけてくれた、神のみに対する心からなる感謝の念がみちあふれていた。……しかし、個々の家庭や、個々の人間の顔にそういつた感謝の念が見られはしたが、それを除けば、市民の一般的な生活態度は昔どおりであって、ほとんど何の変化も見られなかつたのである。

なかにはこういう者もいた。世間のようすがどうも悪くなつた。疫病の時から市民の道徳が低下してしまつた。嵐のあとの船乗りの真似でもあるまいが、ロンドンの連中はこんどの災禍にあつてから妙に凶太くなつてしまつた。不埒とか愚かとかどうか大胆不敵とかどうか、とにかくその腐敗墮落ぶりは昔日の比ではな
いと……(二一九頁)。

このような記述を見ると、疫病をもたらした神の意図は、人間に対して逆効果を生んだと言わざるを得ない。更に、少し後には次のような記述も見える。

……一般の市民について次の言葉を私が述べるとした

ら、あまりに真実をうがちすぎるといふ非難をこうむるであらうか。その言葉といふのは、……その昔イスラエルの子孫は紅海を渡り、エジプト人がことごとく水の中に没するのを見て、ようやくパロの軍勢から救われたことを知つた(旧約聖書「出エジプト記」一四章)が、その時の彼らについていわれた言葉なのであるが……。曰く、「彼ら神の頌美をうたえり、されどしはしがほどにその事跡を忘れたり」(旧約聖書「詩篇」一〇六篇二二～二三節)(二四八頁)。

筆者が、疫病を神のみわざと考へていることは、物語の随所に見られるが、それが人間に及ぼした効果に關する筆者の評価は概ね悲觀的である。つまり、神意は十分人間に通ずる力を欠いていたのか、あるいは、人間はいかにしても度し難いほどに墮落した存在なのかということになる。

三 語り手の態度

語り手H・Fが馬具商であつて、牧師、医師、役人、その他、疫病に対して固定した対応を強いられる職業の者でないことは、彼が自分の感ずるままを語るのに好都合であ

ったと言えよう。しかも、彼のものを見る目は一方に偏することなく、比較的穩健な態度を持っている。それ故はこの物語の題材となっている社会的現象について語るのに恰好な人物であると思われる。

例えば、疫病流行に際して、自分の身の安全を第一に考へて職場を捨ててロンドンを逃れた牧師たちに対して、対立する宗派の者や一般世間の者たちが軽侮の態度を取ったことに關しても、H・Fは慎重な考え方をしている。

英国国教派の牧師たちの相当数が教会の説教壇を見捨ててロンドンを離れた後、非国教会派の牧師たちが、その説教壇に立つて民衆を導く役を果たした。疫病流行中はそれを咎める者は誰もなく当然のこととして受け入れられたところ、

疫病がおさまるやいなや、英国国教会の聖職者たちが見捨てていった教会の説教壇をそれまで守っていた、もともと追放中の、非国教会派の牧師はそこから退いていった。それは当然そうせざるを得ないことであつた。しかし、英国国教会の者たちが非国教会派の牧師たちをただちに攻撃しだし、法令を盾にとつて圧迫しだすとは何としたことであつたらうか。自分たちが病

氣に悩まされているあいだは彼らの説教に喜んで耳を傾け、病氣が回復するやいなや彼らを迫害するとは、何としたことであつたらうか(二三五頁)。

その一方、H・Fは非国教会派の牧師の言動も無条件に是認しているわけではない。

他方また、非国教会派の連中もよくなかつた。彼らは、英国国教会の聖職者たちが逃げ出したことを、すなわち、任務を放擲し、危険の真っ直中にある教会員を捨てていったことを、弾劾した。そして、そういう時にこそ教会員は慰めその他を必要としたのではなかつたか、と詰問した。しかしこのような非難をわれわれは認めることはできなかつた。なぜなら、あらゆる人間がすべて同じような信仰をもち、同じような勇氣をもっているとは限らないからである。人を判断するときには、好意的に、しかも愛をもつてせよ、とは聖書の命じているところである(二三五頁)。

このように、H・Fは、危機に際しての人間の行動を、狭く厳しい標準によつて批判しないようにと心掛けている。そして、ここに見られる一方に偏しない態度は、この物語の内包するものを豊かにするのに役立っている。

ロンドンを捨てた牧師に対すると同様、医師に対しても世間の風当りは強かった。

まだ回復もしていない患者を置きざりにして逃げ出した医者に対する非難たるや、まさにごうごうたるものがあつた。そういう医者も疎開先から帰京したが、彼らを相手にする者はだれ一人としていなかった。逃亡者というのが彼らの綽名であつた(二三四頁)。

しかし、こういう医師に対しても語り手は厳しい言辭は弄せず、むしろロンドンに踏み留まって人々のために尽くした医師その他を称揚することを心掛けてゐる。

……私は……内科医、外科医、薬剤師、市当局者、あらゆる種類の役人、さらにその他猷身的に働いた人々の名譽のために、いかに彼らがその義務を果たすために生命の危険をかえりみなかったかということを書き記すに残すべきだと考へてゐる。事実、ロンドンに踏みとどまつたこれらの人々のほとんどすべてが死力をつくしてその任務に当たつたことは疑いをいれないことだつた。そしてまた、これらあらゆる方面の仕事にわたり、単に命を的に働くといふどころか、現にそのために命を捨てた犠牲者も相当に出ているのである(一二

三七頁)。

疫病流行のため、職人、技術者その他が職を失ひ、賃金が手に入らなくなつたため、社会不安が生じる危険があつた。それが大事に至らなかつたのは、各地から多額の救恤金が寄せられたことが大きな抑制力となつてゐた。それ以外に、H・Fは次のような觀察をしてゐる。

しかし、なおこのほかに、暴民の蜂起を食い止めるのに役立つ二つの事情があつた。その一つは、金持たち自身が食糧を自宅に貯蔵してゐなかつたということである。……したがつて、彼らが今にも蜂起しようという危機一髪のところまでいつて、いつもそうしなかつたのは、金持の家を襲つたところで食糧があるわけではないとの考へがあつたからである(九七頁)。

更に、もう一つの理由が挙げられてゐる。

ところでここに一つ、それ自身としてはいかにも悲惨事だが、ある意味では一種の天の配剤ともいふべきことが起こつた。つまり、八月の中ごろから十月の中ごろにかけて猛烈な勢いで荒れ狂つた疫病が、その間、およそ三万から四万の、貧乏人の生命を奪つたのである。もし、それだけの者が依然として残つていた

ら、それこそ、とことんまで窮迫したのであろうし、そうなれば彼らが耐え難い重荷になったことは明らかであった。……彼らが生きてゆくためには、いやが応でもやがては市内および近郊で掠奪を働かざるをえなくなることも当然考えられることであつた(九七—七八頁)。

更に、

……最悪の事態にいたらなかつたのはなぜかといえ
ば、要するに疫病が猛烈に猖獗をきわめて貧乏人たち
をいわば一網打尽に殺してしまつたからであつた。つ
まり、彼らは何千、何万と群れをなし、暴民化して、
近郊を襲うかわりに、墓穴の中へ、墓穴の中へと転落
していったというわけなのだ(二二九頁)。

これは苛酷な言い方に響くが、しかし、冷静な考察の結果
とは言えよう。

世間に流布された様々な噂についても、H・Fは軽率に
は信じまいという用心をしている。例えば、付添婦が雇わ
れていった先の家でこそ泥を働いた話などは、事実あつた
こととして紹介しているが、更に悪辣な場合については次
のような言い方をしている。

たしかに私も、たとえば、自分の付添つてゐる瀕死

の患者の顔に濡れた布切れをかぶせて、今にも息を引
きとろうというのに強引にその命を絶つたという付添
婦の話も聞かないではなかつた。また自分の看病して
いる妙齡の婦人が氣を失つた際に、正氣に戻らないう
ちに窒息させてこれを殺してしまつた女の話も聞い
た。ある付添婦は何を患者にやつて殺した、とか、全
然食物をやらないで餓えさせて殺してしまつた、とか
いういろいろな話も聞くには聞いた。けれども、こう
いつた話には、いつも疑わしい点が……こびりついて
いた。したがつて、私としてはいつもこの話を真面目
に信ずる氣はなく、こんなものは要するに市民たちが
互いに相手を驚かすためにつくり出した単なる物語だ
とみなしていた(八四頁)。

また、すでに病氣にかかつた者たちのあいだに、こんど
は病氣を他にうつしてやろうという傾向があるという噂が
あり、ある医者は、病氣にかかつた人間には自分の仲間
に対する一種の狂乱と憎悪の念が例外なく生じるのだと説
き、また、人間の性質そのものが腐敗していて、あらゆる
人間が自分と同じくらい不幸な目にあうことを望むのだと
説明する医者等、さまざまであつた、これに対してH・F

は次のように言っている。

しかし、私はこの重大な論点に対して別な解釈を提出したいと思っている。つまり、私はそのような事実を認めない、と答えることによってこの問題に対する解決案を思っているのである。いやむしろ、問題になっていない事実は真相をつくものではなく、ただ単なる不平にすぎない、つまり、世間で悪評をこうむっている自分たちの薄情で残酷な行為をなんとかいっつくろうために、近辺の町村の連中がロンドン市民に対してやたらになげかけた不平にすぎないと私はいいたいのである(一五四頁)。

すなわち、ロンドン市民が田舎へ行って宿所を提供してもらおうとしたとき、田舎の人々は、ロンドンのやつらは他人の迷惑をかえりみないばかりか、むしろ病気をうつしたがつているということによって拒絶する口実としたのだということなのである。

語り手の、なるべく中庸の立場を取ろうという心掛け、動乱時の取り沙汰を伝えはしても、それを一歩下がって落ち着いて考えようという態度は、彼を事件、世情の公平な伝達者として、ふさわしいものになっている。

しかし、その一面、融通無碍を志す余り、彼の言動が基準を外れ、一貫性を欠くという弊も時に出てくるように思われる。

例えば、当局は、疫病にかかった者のいる家をつきとめ閉鎖するために市民の中から大勢の検察員を任命した。そして、H・Fもある時期、この役を仰せつかったのであるが、次のように言っている。

このころになると、私自身にもちょっと困ったことが生じてきた。……つまり、ポートソークン区の区長から、私の住んでいる地域の検察員に任命されたことである。われわれの教区はすこぶる広く、私を含めて検察員の数も十八名の多きに達していた。正式には検察員(examiner)だが、市民たちは見廻り(visitor)と呼んでいた。私は初め、こういう任務から免れようと一生懸命にがんばり、区助役ともずいぶん議論した。たとえば、そもそも家屋閉鎖ということに対して私が反対である旨を力説した。自分の意見に反対な対策を私にやらせようというのはずいぶん非道な話ではないか、ともいった。そんなことをしたって所期の目的を達することができるものが、ともいってやった。しか

し、私がかちえた先方のぎりぎりの譲歩は、その役は二ヵ月勤務ということでもロンドン市長から任命されるのが普通であるが、私の場合はただ三週間つとめればいいということだった(一五九頁)。

H・Fは家屋閉鎖に反対であるばかりでなく、検察員の仕事は常に疫病感染の危険にさらされているので、早く止めたくてたまらなかった。そこで彼は術策を弄したのであった。

私は代わりの人が見つかり、当局もその人を認めてくれたので、まもなく危険な役目から放免されることになった。じつは代わりの人というのも、なにがしかのお金を包んでぜひ引き受けてくれと私が頼んだのだ。はじめ定められた二ヵ月という勤務期間どころか、三週間以上とは勤めなかったわけである(一六九頁)。自分の危険を免れるために、金を与えて、他の人をその危険にさらすというのは、語り手の信じているはずのキリスト教の精神には完全に悖ることではなからうか。しかも、その仕事は、彼自身が有効性を認めていない仕事なのである。

デフォーの他の作品についても言えることであるが、多

くの矛盾を含みつつ、結局はある現実の姿を映し出すところに、彼の書くものの特徴の一つがあると思われる。

注

- (1) Everette Zimmerman: *Defoe and the Novel*, p. 108.
- (2) *ibid.*, p. 109.
- (3) Louis Landa: "An Introduction to Oxford English Novels edition", p. xviii.
- (4) *ibid.*, p. xxi.
- (5) Paula A. Backscheider: *Daniel Defoe, Ambition and Innovation*, p. 144.

(頁数は Oxford English Novels 版による。訳文は中公文庫版の平井正穂氏のものに依りしていただいた。)